

(様式3)

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	滋賀県	市町村名		大学名	
派遣日	令和6年8月22日(木曜日) 13:00~16:00 ※派遣当日の日程: 13:00-13:30 当日打合せ 13:30-13:35 あいさつ 13:35-15:00 講義 15:00-16:00 ワークショップ ※派遣当日の次第と講座のチラシを添付します。				
実施方法	※いずれかに○をつけてください。 派遣 / 遠隔				
派遣場所	滋賀県立県民交流センター 305 会議室 (滋賀県大津市におの浜一丁目1-20 ピアザ淡海3階)				
アドバイザー氏名	横浜市教育委員会事務局学校教育企画部 小中学校企画課 指導主事 横溝 亮 氏				
相談者	滋賀県総合企画部国際課 (講座開催者: 公益財団法人滋賀県国際協会) (参加者: 教員(外国人児童生徒担当者等)、日本語指導員、母語支援員、子どもへの日本語ボランティア指導者等)				
相談内容	本県における外国人児童生徒への対応において、 ・毎年、当協会で開催しているものの、継続した知識や指導法の蓄積、教材の共有がされていない。そのため、担当教員や日本語講師が個々に指導法や教材を模索しながら指導している現状が長年続いている。 ・多言語教材や資料、ツールも多くあるが、現場の教員や日本語指導者等に情報が知られていない。 ・日本語指導者が孤立して対応していることも多くみられる。学校全体として連携がとられていないことや環境整備があまり進んでいないことも多い。 といった課題があり、 横溝氏に、児童生徒の学びの環境づくり(国際教室と在籍学級)や児童生徒への授業づくり(「授業事例の紹介」「授業づくりの方法」「教材・教具の活用について」「学校、外部、保護者との連携などについて」「デジタル教科書活用の紹介」)について、講話やワークショップの実施を依頼した。				
派遣者からの指導助言内容	2024年度外国にルーツを持つ子どもへの日本語指導者養成講座 Part16 「外国にルーツを持つ子どもへの指導・支援 ～教科と日本語の統合学習の授業づくり～」と題して、講話いただき、日本語指導と教科指導の統合的な授業づくりのワークショップを実施し、ご助言いただいた。 【講話内容】 1. 外国にルーツを持つ子どもへの指導者に必要とされる資質や能力とはどういったものか。「外国人児童生徒等担当教員に『求められる具体的な力』自己評価票」により確認。 2. 現状と課題の説明と共有 ①文部科学省の調査結果によると、日本国内で日本語指導が必要な児童生徒の数は増加しており、特に神奈川県、愛知県、東京都などで顕著である。外国にルーツを持				

つ子どもたちは、多様な言語・文化的背景を持つため、日本語指導が複雑化している。主要な課題として、以下の点が挙げられる：

- 人材不足：多言語対応が必要であるため、母語支援員の確保が難しい。
- 予算不足：突然の転入が多く、適切な日本語指導の計画と予算確保が困難。
- 言語対応の困難：保護者との言語差が学校教育への理解不足を招く。
- 他団体との連携不足：地域の大学や関連機関との協力が不十分。

②講師が所属する横浜市の現状と取組および教科と日本語指導と教科指導の統合的な授業づくりについて

- ・動画も交えて横浜市での現状と取組の紹介があった。また、取組の紹介の中で、早い段階から教科につながる学習を取り入れるようにしてこられたことや、どのように個々の児童生徒に向き合ってきたかなど、参加者に参考となるよう丁寧な説明があった。

・JSL カリキュラムについての説明

講座では、教科学習につながる日本語指導の重要性が強調された。その中で「JSL カリキュラム」についての説明があった。これは日本語を学ぶことと教科内容の学習を統合するカリキュラムであり、子どもたちが日本語で学習活動に参加する力を養う。具体的には、以下の点が特徴：

- 個別のカリキュラム作成を前提とし、子どもの実態に応じた教育を行う。
- 学習内容を具体物や体験を通じて学び、理解を深める。
- 言語の調整や明確化を行い、子どもが学習に参加しやすい環境を提供する。

・具体的な授業づくりの紹介

これまでに、講師が実施されてきた授業づくりの大切なポイントと共に具体的な教材の活用や在籍学級との連携なども交えて紹介があった。また、ボランティア教室からの参加者向けには、学校外での支援の在り方について、必ずしも学校の教科書の補完をしなくてよいこと、むしろ読む楽しさや学習する楽しさを感じられる場の提供であってもよいと思うと講師の考えを提示くださった。

・視覚的支援（実物・図表・写真・絵等）とデジタル教材の積極的な活用

→光村図書「学習者用デジタル教科書活用事例 ～横浜市 国際教室での取り組み～」の提供と活用方法の説明、デジタル教材のメリット・デメリットなどの紹介

・わかりやすい言葉づかい

・欲張りすぎないわかりやすい授業づくり

・国際教室からの発信の大切さ（多様性を尊重した教育環境の整備の必要性）

・個々の児童生徒の日本語の力に合わせた指導の工夫

・他団体との連携強化

→大学や地域社会との連携を深めることで、より多角的な支援を提供できるようになる。

【ワークショップ】

「日本語指導と教科指導の統合的な授業づくりワークシート」を参考に、1グループ5～6人、8グループに分かれ、在籍学級の学習前の先行学習としての取り出し指導1時間の授業案を作成。その後、ポスターセッション形式で発表した。

	グループ構成と教材は次のとおり： ・ 小学生対象グループ：5グループ 教材：国語「ごんぎつね」 ・ 中学、高校生対象グループ：3グループ 教材：社会「民主政治のしくみ」
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	横溝先生の講話では、ご自身が実践されてきた授業の事例や流れが詳しく紹介された。子どもたちの「できない」部分ではなく「できる」部分に目を向け、寄り添う姿勢なども含め、今回参加した先生方が現場で実践する際の大きなヒントになったと思う。 当講座の目的は、どのステージの日本語段階の子どもにおいても、日本語指導だけでなく、教科につながる指導との統合的な授業づくりを実践する重要性を伝えることだった。具体的には、そのための教材の使い方や授業の構成方法、考え方について学んでいただく機会となり、今後の指導に生かされることが期待される。 また、ワークショップでは、参加者から「2学期からの実践にすぐに活かせそうなのが発見できたので、参加してよかった」や「他の先生方と意見交換ができた」という感想が寄せられた。このように、今回の活動が大変有意義な時間であったと考える。 また、研修に対する感想から、参加者の多くは研修に対して、実践的な内容であることや他の参加者との交流を求めていることが分かった。そのため、次回以降はそれを踏まえた研修内容とすることで、より参加者の満足度を上げ、現場の実践へと結びつく内容としていきたい。 今後も、日本語指導と教科指導の統合的な授業づくりが、県内の先生方や関係者に広まり、実践されることを目指していきたい。また、多文化共生の地域づくりの推進に努めたい。

1枚にまとめる必要はありませんので詳細に記載願います。

なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。